

第 23 回薬学同窓会講演会・懇親会（令和 8 年 7 月 11 日）レポート

研究に携わる者ならば、誰しも一度は、自らの手元に生まれた発見や発明に、これまでにない可能性を感じる瞬間があるのではないだろうか。それは、単なる学術上の新知見にとどまらず、もしかすると人類の福祉と発展に資するものとなるかもしれない。しかし、その成果を社会に届けるためには、論文として発表するだけでは足りない。知財を守り、資金を集め、人を集め、組織をつくり、幾多の困難を乗り越えて、初めて発明は社会実装への道を歩み始める。所属する組織の中に、そのための資金や組織力が十分に備わっていないとき、研究者は何をすべきなのだろうか。折角の発明や発見を、文献上の記録として残し、いつか誰かが形にしてくれることを願うだけでよいのだろうか。

第 23 回薬学同窓会講演会は、株式会社アークメディソン代表取締役である田中圭悟博士(第 34 回生)を講師にお招きし、「スピードで世界を驚かせる創薬ベンチャー」と題してご講演いただいた。田中博士は、本研究科博士課程前期修了後、エーザイ株式会社に入社され、創薬合成研究に携わるなかで、創薬合成技術 HiSAP®を着想し、長年にわたりその技術を磨き上げられた。その後、2019 年にエーザイからスピントウ形式でアークメディソンを創業され、短期間に多数の新薬候補化合物を創出し、

製薬企業とのライセンス契約や臨床導入に向けた取り組みを着実に進めておられる。

ご講演では、創薬研究の日常業務と並行して、前例のない技術開発に挑み、特許出願、社内での技術開発の継続そして予想外の退職と創業に至るまでの道程を、率直にお話しいただいた。なかでも印象的であったのは、創業前を振り返って最も重要であったものとして「初動」と「知財戦略」を挙げられたことである。研究成果を社会実装へとつなげるためには、成果が形になってから考えるのでは遅い。何を守り、どのように育て、誰と組むのかを、研究の早い段階から見据えることの重要性を、田中博士の歩みは雄弁に物語っていた。



創業後の困難もまた、研究とは全く異なるものであった。会社設立、事業計画、資金調達、研究体制、営業体制、人材採用、知財移転、投資家への説明など、研究者で

ありながら経営者として向き合わなければならない課題は尽きない。投資家からは「それほど良い技術なら、なぜ元の会社は手放したのか」と問われ、信用を得るところから始めなければならなかったという。研究者が社長を務めることの難しさを語りながらも、田中博士の言葉には、発明を社会に届けることへの強い覚悟と、困難を前にしても歩みを止めない気概が感じられた。

一方で、田中博士は、ベンチャーの力を個人の突破力だけに帰すことはなかった。困難を乗り越える鍵は「人」であり、創業時には個の強さが重要であっても、事業が進むにつれてチームの力がより重要になると強調された。アークメディスンは「挑戦」を会社のバリューに掲げているという。己が走る「起」業が、いつの間にか人を止める「企」業になってはならない、という言葉は、組織を率いる者にとって重い警句でもあった。

講演の最後に示された「一緒に創薬に挑戦しましょう！」というメッセージは、単なる会社紹介の結語ではなく、薬学を学ぶ在学生、若い同窓生、そしてアカデミアに身を置く我々に向けられた呼びかけであったように思う。薬学の研究成果を社会に届けるために、大学、製薬企業、ベンチャーがそれぞれの強みを持ち寄り、新しい創薬エコシステムを築いていく。そのような時代を切り拓く同窓生の姿に、聴衆は大いに

刺激を受けた。

当日は、田中博士のかつての指導教員である小笠原國郎先生をはじめ、佐藤進先生、竹下光弘先生にもご来聴いただいた。久しぶりに薬学研究科に戻られた同



窓生を、恩師や先輩方、在学生が迎える場となり、同窓会講演会にふさわしい温かな時間となった。講演会後には田中博士を囲んで懇親会も開催され、創薬研究、起業、そして薬学の未来について、和やかな中にも熱のこもった懇談が続いた。次世代の薬学人に向けて、研究成果を社会に届けることの重みと可能性を伝える、誠に意義深い講演会であった。(岩渕好治)